

薩摩藩における蘭学受容とその変遷

田村省三

The Acceptance of Rangaku and Changes in the Satsuma Feudal Domain

- ①集成館事業と近代化の背景
- ②「蘭癖」から「蘭学」へ
- ③齊彬を育んだ蘭学者たち
- ④実用の学問の重視
- ⑤技術者たちの蘭学受容
- ⑥種痘普及の事例
- ⑦開成所における蘭学と英学
- ⑧ウイリスの招聘と近代医学の普及
おわりに

【解説】

本稿は、日本の近代化の先駆けであり、薩摩藩の近代科学技術の導入とその実践の場であつた「集成館事業」の背景としての視点から、薩摩藩の蘭学受容の実際とその変遷について考察したものである。

薩摩藩の蘭学は、近世における博物学への関心と島津重豪の蘭学趣味から出発し、オランダ通詞の招聘や蘭方医の採用をとおして、しだいに領内に普及していく。そして、蘭学が重用され急速に普及していくのは島津齊彬の時代であり、藩が強力に推進した「集成館事業」の周辺に顕著であった。しかし、藩士たちの蘭学の修得については、中央から遠く離れた地域性や経済的な困難もあって、江戸や大阪への遊学は他の地域に比べて少なかつた。むしろ、中央の優秀な蘭学者を藩士に採用したり、蘭学者たちとの人脈を活用するという傾向が強かつたと思われる。ただし長崎への遊学は、例外であった。

薩摩藩の蘭学普及は、藩主導で推進されている。したがって地域蘭学の立場からすれば、同時代の諸藩とはその目的、内容と規模、普及の事情に相違がみられる。一方で、蘭学普及の余慶がまったく領内の諸地域には及んでいなかつたのかと言えばそうではない。このたび、地域蘭学の存在を肯定するとのできる種痘の事例を確認することができた。それは、長崎でモーニッケから種痘の指導を受けた前田杏齋の種痘術が、領内の高岡や種子島の医師たちに伝えられ実施されたという記録によつてである。また薩摩藩は薩英戦争の直後、藩の近代化を加速するため、洋学の修得を目的とした「開成所」を設置する。ここでは当初蘭学の学習が重んじられていたが、しだいに英学の重要性が増していく。さらに明治二年、国の独医学採用に伴い、藩が英医ウイリアム・ウイリスを招聘して病院と医学校を設置してから、英國流の医学が急速に普及する。この地域が本格的に西洋医学の恩恵を受けるのは、以降のことである。